

岐路に立つ

フラワー長井線

8/23 山新

<<2



利用の9割近くを高校生の通学が占める
—富内駅

長井市僱傭生済学習ラザのホールの空気は張り詰めていた。先月三日の「県立高等学校の将来の在り方について」の県民説明会。「公共交通機関の関係で道路が狭まらないように」「高校生の通学にとって公共交通機関の影響は大きい。その点も調整したい」…。地域の高校が姿を消しか

ねないという不安の一方、四十四万人をピークに減っていく人口、少子化、二〇〇〇年度に百万人台を割った。長井線が大きな位置を占める。三年度八十七万人と減少が続いている。

県教委は第五次県教育振興計画に基づいて、置賜地域に当たる南学区で二〇一四年度までに、県立高校を現行の十二校から八校程度に再編整備する。この検討結果を示した。内訳は、東南置賜地域で七校を六校程度に、西置賜地域で五校を二校程度にする内容。少子化の波による生徒数の減少を受け、対応だが、地域の教育関係者、保護

進路の選択肢を広げる

高校生の足 8割超す通学定期利用

省らに大きな衝撃を与える。岩手県の三陸鉄道が、県立高校再編の行方とともに、その先行きに大きな関心が寄せられたフラワー長井線の年間利用者数の推移はグラフの通りで、一九九〇年度の

る、岩手県の三陸鉄道が、高校生の利用が九割で最も高い。フラワー長井線はこれとほぼ肩を並べ、全国でも屈指の通学路線。地域の人材育成に貢献してきた。山形鉄道は沿線高校と

部活動終了後の下校など生徒の生活のリズムになっている。とりわけ冬期間は助かっている。生徒の通学の安全確保にも結び付いており、保護者の安心と負担軽減につながっている」と強調する。

一時期、バス代替案が浮上したが、試算では利用者負担が「割高」になる上、定時性を確保しにくい冬季間の道路事情もあり、現実味を帯びなかった。沿線の高校に加え、米沢、山形方面の高校にも進学していく。長井線があるからであり、これを失えば、進路の選択肢を狭めることになる」と長井南中PTAの内谷重治会長。「交流が切磋琢磨(せつそたくま)する土壌をつくってきた。そのすべを失えば、地域の教育の力の低下になりかねない」として、長井線行続に望みを託している。(長井支社・青塚 晃)

フラワー長井線の年間利用者数

